

## 第14回地すべり現地検討会報告

## 「秋田県・狼沢地すべり及び逆川地すべり」

東北工業大学土木工学科 千葉 則行

東北支部主催（後援：秋田県）の地すべり現地検討会が、昨年10月1日、2日の両日にわたり、県南東部を流れる成瀬川沿いの狼沢地すべり及び逆川地すべりを中心に行われた。従来から、成瀬川沿いは谷地地すべりを代表とする大規模な地すべりもみられるなど県下の密集地帯の一つとして知られ、建設省所管及び林野庁所管の地すべり防止区域において対策工事が進められてきた。このうち現地入りした狼沢地すべり及び逆川地すべりは林野庁所管の地すべり防止区域であり、見学、宿泊の手配などに際して秋田県林務部森林土木課及び雄勝農林事務所林務課の方々から大変お世話を戴いた。

狼沢地すべり（197.3ha）は成瀬川右岸側の標高400～800mの山腹斜面に位置している。以前から滑落崖や窪地などの地すべり特有の地形が認められていたが、平成3年の調査で地すべりの活動が確認された。下流には国道342号線、集落があるため翌年指定を受け、それ以来地すべり発生機構調査、地下水排水工（トンネル暗渠、集水井）、排土工が実施されてきた。

一方、逆川地すべり（17.1ha）はさらに成瀬



川上流の左岸側に位置し、幅約300m、斜面長約400m、すべり面深さ30～40mの規模のものである。この地すべりは昭和31年4月に発生し、上流側にある集落へのアクセスが遮断されるなど地域住民に多大な影響を及ぼした。その後の活動も、地すべり地内の斜面傾斜が30～50°と急傾斜であったため、一年間活動が続いた。対策工事はその年から行われ、地下水排除工（集水井工）、地表水排除工（水路工）が施されてきた。

現地検討会には大学、コンサルタント、官庁関係から90名ほどの参加があった。初日の午後1時、宿泊所・討論会場である湯沢市南部の「秋田いこの村」を出発、バス三台で一路現地に向けて出発した。最初の見学場所である逆川地すべり地に到着後、支部長の盛合先生、雄勝農林事務所の方々による開会、歓迎の挨拶があり、引き続き現地説明が行われた。今回の説明は、成瀬川沿いが地すべりの密集地帯でかつ大規模な地すべりもみられるところでもあることから、既往の文献、研究成果の紹介も交えながら進行した。

まず初めに小生が成瀬川流域の地質概要、地すべりと地質の関わり合いを、そして副支部長の宮城先生が地形概要、地すべり地形自体の変遷など、配布資料にもとづいて解説した。その内容の主なものを列記すると、この流域は成瀬川に沿って南北に延びる大規模な複向斜構造が発達し、兩岸の山腹斜面を構成する基岩層が成瀬川に向かって傾斜している。このため長大な流れ盤構造を有する山腹斜面が形成され、さらに斜面を構成する基岩層も硬質泥岩・ベントナイト質凝灰岩互層および黒色硬質泥岩を主とする西小沢層で構成されており、斜面全体にわたって地すべりの発生しやすい場となっている。また流れ盤構造を有する長大な山腹斜面で、さらに同一斜面上に様々なタイプの

